
僕と時と君達と

たゆた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と時と君達と

【Nコード】

N4914E

【作者名】

たゆた

【あらすじ】

時間と記憶を無くした少年と彼に起こる色々な出来事。

プロローグ（前書き）

これが初めて書いた小説です。
ご意見やご指摘など頂ければ嬉しいです。
最終話まで書き上げたいと思います。
今後ともよろしくお願いします。

ブローグ

「それじゃあ、いこうか」白衣を着た初老の男性は、上品な笑顔でそう言った。

荷物を詰め込んだ鞆を持ち、病室の出口まで進んだとき、僕が二年三ヶ月いたらしい部屋を見渡した。

「退院おめでとう」女性の看護師がそつと手を差し出した。

「ありがとうございます。浅上さんには色々と迷惑かけちゃってすみませんでした」

握ったその手を強くしつかりと握り返して、浅上看護師は静かに首を振り

「うっん、気にしない、気にしない」屈託の無い子供のような笑顔でそう言ってくれた。

最後に、もう一度だけ病室を見渡す。入り口には「進遠 裕」という名札がある。僕の名前だ。複雑な気分だった。寂しいのか悔しいのか。色んな気持ちがポツカリと穴の開いた心の隙間に流れ込んでくる。

見慣れた病棟を通り過ぎ、エレベーターに乗る。ドアが開き総合受付のあるやたらと広いフロアーを出口へと進む。一步一步近づく外の景色。眩しい。期待か不安か、胸が締め付けられる。知らず俯いた視線の先で担当医と浅上さんの足が止まった。

「ほら！ 背筋伸ばして！」浅上さんは僕の背中をポンと叩く。
「それでは、お世話になりました」二人に向かって軽くお辞儀をする。

「辛い事があつたら相談にきなさい」担当医の西野先生は優しく笑う。

「大丈夫。君は強い子。でも、辛い事があつたらいつでもおいで。力になれる事はあるかもしれないから」浅上さんはにっこり笑い、そう言うと言の手に何か書かれた紙を握らせた。

これはメールアドレスだろうか。ノートを切り取った紙には英字と数字の羅列と「困った事があつたらいつでも連絡してね！」と書かれている。

「ありがとうございます。先生、浅上さん。僕は多分もう大丈夫。他の看護師さん達にも宜しくお伝えください」うなずく二人。少しの沈黙の後。

「最後に……僕の……僕の……時間は動いていますか」入院中、何回も言った台詞だ。

僕の言葉に浅上さんはまっすぐ僕を見て、真剣な面持ちでこう言った。

「君は止まっていない。君の時間は私達と同じ。ちゃんと流れている」

1（前書き）

のんびりペースでしか書けません、よろしくお願いします。
ご意見、ご指摘など、色々のご教授ください。

「……………い」何か聞こえる。

「……………い」なんだよ。

「……………おい！起きろ」全身を誰かに強く揺さぶられた。

「うわっ！なんだよ！お前いつの間に」

「ご挨拶だな、裕。お前が起こしに来てくれて言ったんだろっが」

「……………そうだっけ」

「まったく、今日がなんの日かわかっているのか？これは、戦い。戦争なのだ。そんな調子で大丈夫なのかよ」

「……………なんだよ戦争って・大袈裟なやつだな」

そう、今日は幼馴染であり同級生のこの騒々しい輩。森谷 守に誘われて、進学したばかりの高校のクラス親睦会なるものに参加する事となったのだ。

「……………ところで守。なんでお前・添寝しているんだ！ええい！気持ち悪い」

守を僕の神聖な場所から全力で突き落とす。

「いてえ！まあ、そんな事はどうでもいい。腹へったぞ！起こすのを手伝った御礼に、この親友に朝食を用意したまえ」くわつと目を見開きそんな事をいう。

「うーん。起きたばかりなのに、物凄く疲れてきた」こうなったら仕方がない。緩慢な動作で起き上がり洗面所に向かう。

鏡に映る自分。もう慣れたとはいえ二年の空白はそう簡単に埋まるものじゃない。

僕は成長している、この体は年を重ねている。僕の意識と記憶を

置き去りにして。

守の「まだかよー」という声で我に返る。だめだ。考えるな。今は腹をすかせた野生動物に餌を与える事に集中しよう。冷蔵庫にあるものは、ニンジン、卵、ベーコンにニラとピーマン。簡単な野菜炒めくらいなら作れそうだ。

一人暮らしをしていると、料理を作るという事が必要になってくる。腕前の程は置いておくとしてだ。外食ばかりに頼れるほど金銭的余裕はないのだ。十分かからずに作り上げた野菜炒め。刻まれた野菜の形は歪だ。それどころか、皮もろくに剥けていない物もある。我ながらひどい見た目だと思いながらも皿に盛る。そう、見た目だけの問題だ。味付けには自信がある。自慢げに守に皿を差し出す。

「……い、いただきます」箸を伸ばす守を、どうだと言わんばかりにみる。

「あ、相変わらずの食感と所々に苦いところあるが、後味は最高だ！」と、不思議そうに首を傾げ感想を口にした。

何か含みを感じるが、まあ、いいだろう。

「今日、十二時に駅前で待ち合わせだったね」僕の言葉に守が無言でうなづく。

「後三十分しかないんだけど」ボソツと言ってみる。
ガチャリという音と共にハッと顔をあげる守。

「な、なんだって！ おい走るぞ裕。急げ急ぐのだ」

「だああ、大声出すな！ 少しは近所迷惑を考えろ」

十分後。僕は息を切らしながら少し前方に見える暴君に引きずられるように手を引かれ全力で駆けていた。

「急げ！ もつと早く！ 俺達には時間が無い」

「……くっ！ もうだめだ…少し休ませて」もう息が続かない、足は棒のようだ。

「……き、気合が足りんぞ！ 裕。これしきの事でこれからのサバイバルを生き抜けると思っっているのか！」

「もう、ほんと無理…うぶ…吐きそう」

「仕方が無い。急に止まるんじゃないぞ。ゆっくりだ。ゆっくりペースを落とすんだ」

以前テレビで見た事がある。激しい運動後に急に動くのやめると心臓に負担がかかるとか。下手したら死ぬ可能性もあるらしい。守をみるとケロっとした表情。さすが陸上部といったところか。

「ところで裕。最近の調子はどうだ？」そう言った守の顔に普段のおちやらけた表情は無い。守の言う「調子」とは体の事じゃない。心の事だ。

「ああ、大丈夫。もう、あれから一年も経つんだ。なんだよ。心配してくれていたのか？」ふざけた調子で言った。

「……お前な」今にも涙が滲んできそうな瞳で僕を見て言う。素直にありがたい。

今、僕が楽しく日々を過ごしているのは、守や浅上さん他にも色々な人達に支えてもらったお陰だ。

三年前。家が火事になった。

当時、この界隈で連続して発生していた住宅火災。いずれも原因となるものが見当たらず不審な点が多い為、連続放火事件として周辺の住民を恐怖させていた。犯人は未だ特定すらされず、逮捕に至っていない。

その一連の放火事件による被害は、家屋全焼が四件。半焼が六件。軽傷者三名。重傷者二名。死者三名。この死者三名の内、二名は僕の両親だ。僕は無傷で門柱にもたれ掛かる様に倒れていたらしい。そして目が覚めたら病院のベッドの上で二年の時間が過ぎていた。

両親が亡くなった事を知らされたのはその時。僕が目を覚ましたとの報告を受け、駆けつけてくれた父方の叔父から聞かされた。違和感があった。僕以外、すべての人にとっては二年も前の事。周りには二年前の出来事だったとしても僕にとっては、最近の出来事ばかり。

事件当日の記憶は無い。それどころか事件前の数ヶ月の記憶が所々欠落している。

大袈裟かもしれないが、叔父や病院の先生の話す当時の事は他人事。僕にはまったく関係の無い昔話。だから両親の墓標を目の前にしても涙も浮かばなかった。何も感じなかったわけじゃない。心は悲鳴をあげていた。だけど実感というものがまったく無い。

中学校に入学したばかりだった僕が目覚ませば受験生。まったく笑えない冗談だ。

自棄になった僕は、看護師や先生に八つ当たりした。特に、その年から看護師になったという浅上さんには辛く当たっていた。

彼女は新人らしく、やる気と希望に溢れていた。少し乱暴な所もあるけど、明るくて前向きな性格。それが僕には眩しくて、どこかに鈍い痛みを感じた。

様子を見に来てくれた時も彼女の問い掛けには一切答えず、面白くもないテレビをひたすら見ていたし、彼女の運んでくれる食事には手もつけずに回診前に行われる血圧や体温の計測も拒んだ。

そんな彼女と打ち解けたのは、親族以外の面会が許可された日の

事。

いつもの調子で定期回診前の血圧と体温を測ろうとする浅上さんを無視し続けていた時、不意に病室の扉が開いた。守だった。僕より背が低く、近所一のいたずらっ子だった守だ。

久しぶりに見る守は、泣き顔だった。いつの間にか僕より背も高くなっている。

「よう！ 久しぶり！ 調子はどうだ？」全く時間を感じさせない笑顔。

守の登場に浅上さんは「お友達？ なら言っておいて、この子、私に仕事させてくれないの」なんて事を言い出した。

うなずいた守はスリッパで僕の頭をスパーンという良い音をさせて迷い無く叩いた。

「お前な！ いつまでもガキみたいに拗ねてるんじゃないぞ！」守の声が聞こえる。そうなのかもしれない。だけど…僕は…僕の意識はあの時のままだ。

「ええい！ まだ目が覚めてないのか！ 人に迷惑をかけるな！」という声と共に、もう一撃スリッパ攻撃が炸裂した。

お前がそれを言うのかよ。呆氣にとられた僕は、口をポカーンと開けて間の抜けた顔をしていたらう。火事に遭い両親を亡くして二年間も眠り続けた僕を挨拶もそこそこに殴りつけるのだから。

「…ぷっ…君もそんな顔するんだね」と言う浅上さんは大笑いしている。全く、なにが面白い。でも、何かが暖かった。

僕は「もう、どうでもいいや」と知らず呟いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4914e/>

僕と時と君達と

2010年12月31日05時51分発行